

Ⅲ. 国際協力プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

SDGs（持続可能な開発目標）に掲げられた目標からもわかるように、現在、人類の抱えるもっとも深刻な問題の1つは、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国等の途上諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として貧困に喘ぎ、教育、保健・衛生・医療、食料・栄養、環境、雇用、平和、人権といったさまざまな面で、基本的なニーズを満たすことができない状態にあります。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な発展の軌道に乗るためには、そこに住んでいる人々自身による開発努力が不可欠です。競争市場の中で民間部門の産業や企業が発展し、付加価値や雇用を創出していくとともに、経済や社会のさまざまな領域で政府が適切な役割を果たしていくことが求められています。市場と政府それぞれの利点をうまく活用する一方、双方の不完全な部分を制度や組織で補完・代替し、途上国は長い時間をかけて、継続的に、自らの力で開発に取り組んでいく必要があります。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国と緊密に協力しながら、資金面、技術面、人材面、貿易面、情報面等の幅広い分野で、積極的に開発問題に関与していかなければ、貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。先進国政府による国際協力、国連等国際機関による国際協力、NGOsなど市民社会による国際協力、さらに、民間企業による資金や技術の移転、貧困層向け BOP ビジネス、ソーシャルビジネスを通じての国際協力などが、途上国の経済社会の発展に寄与しています。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関連するさまざまな分野で優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、途上国の経済・社会を分析することのできる高度な専門的知識・技術、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、高度な語学力による国際コミュニケーション能力などが、国際協力に携わる人材にとって必要不可欠な個人的資質・能力であるといえます。複雑な経済・社会の構造を的確に分析し、さまざまな困難な環境の中で、途上国が進むべき方向を見極め、それに合った開発政策や開発戦略を考えることのできる、たくましい精神力と高度な専門能力をもった人材こそが、貧困という人類的な課題を解決するために求められているのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、人類的課題に挑戦する人材を養成する場として設定されました。複数の学部配置されている、国際協力、途上国開発に関連したさまざまな専門科目の学修を中心に、国際的なコミュニケーション能力の強化も進めていきます。

さらに、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて、さまざまな学部の担当教員と、そしてさまざまな学部の学生と緊密に協力しながら、学部横断的な、学際的な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力を育成していくことを目標としています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジア途上諸国などでの現地調査（「Project-Based Field Work」）を実施し、その結果に基づいて調査報告書を執筆するという実践的な教育を重視しています。

2. 2025 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP 演習A	FLP 演習B	FLP 演習C	総計	実施形態
1	中川 康弘	経済	5	11	5	21	単独(A・B・C)
2	林 光洋	経済	11	4	4	19	単独(A・B・C)
3	平澤 敦	商	12	10	7	29	単独(A・B・C)
4	新原 道信	文	6	7	5	18	単独(A・B・C)
5	山田 恭稔	国際経営	3	1	2	6	合併(A・B) 単独(C)
6	中村 俊之	全学連携 教育機構	8	13	－	21	単独(A・B)
7	戸川 正人	全学連携 教育機構	3	－	4	7	単独(A・C)
合 計			48	46	27	121	

3. プログラムスケジュール

- 4 月 第 1 回部門授業担当者委員会
- 5 月 第 2 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 6 月 第 3 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 7 月 ガイダンス（一年次生向け）
国際協力プログラム説明会（一年次生向け）
第 4 回部門授業担当者委員会
- 9 月 第 5 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
国際協力プログラム交流会
- 10 月 国際協力プログラム説明会（一年次生向け）
第 6 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 11 月 2026 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第 7 回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）
- 2 月 第 8 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

国際協力プログラム説明会（一年次生向け）

実施日： 2025年7月10日(木)12:40～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 6103 教室
実施内容： 履修生によるゼミ紹介

国際協力プログラム交流会

実施日： 2025年9月27日(土)13:00～16:00
実施場所： 中央大学 多摩キャンパスフォレスト館 F602
実施内容： 研究内容やゼミ活動の紹介

国際協力プログラム説明会（一年次生向け）

実施日： 2025年10月2日(木)17:10～19:30
実施場所： 中央大学 多摩キャンパスグローバル館 GG701
実施内容： プログラム全体と各ゼミの紹介、ゼミの個別相談会

期末成果報告会

- (1) 実施日： 2025年12月13日(土)9:50～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 3453 教室、3454 教室、3455 教室
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告
- (2) 実施日： 2025年12月13日(土)16:45～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 3551 教室
実施内容： 特別講演
テーマ： 社会は簡単には変わらない。でも私たちは無力ではない。
～小さな一歩が、社会を少しずつ変えていく～
講演者： 青山 真歩 氏
(認定特定非営利活動法人かものはしプロジェクト)

5. これまでの履修生の主な就職・進学先実績

国際協力機構（JICA）、JICA 海外協力隊（青年海外協力隊）、日本国際協力センター（JICE）、海外産業人材育成協会（HIDA）、国際連合工業開発機関（UNIDO）、国立青少年教育振興機構、日本貿易保険、伊藤忠商事、豊田通商、日本郵船、日本航空（JAL）、全日本空輸（ANA）、ANA テレマート、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道（JR 東日本）、東海旅客鉄道（JR 東海）、山九、JTB、エイチ・アイ・エス、三菱 UFJ 銀行、三菱 UFJ 信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、りそなホールディングス、横浜銀行、千葉銀行、ゆうちょ銀行、信金中央金庫、東邦銀行、多摩信用金庫、三井住友信託銀行、日本政策金融公庫、大和証券グループ本社、大和証券、岡三証券、ジェーシービー（JCB）、第一三共、IHI、カカクコム、キヤノン（Canon）、トヨタ自動車、日産自動車、スズキ、神戸製鋼所（KOBELCO）、クボタ、NEC、日本 IBM、ソニー、シスコシステムズ、太平電業、日立製作所、デンソー、ブリヂストン、ダイキン工業、千代田化工建設、清水建設、本田技研工業、京セラ、矢崎総業、三井物産、大王製紙、大日本印刷、中外製薬、デンカ、船井総合研究所、アビームコンサルティング、KPMG コンサルティング、PwC コンサルティング、アクセンチュア、フロンティア・マネジメント、エル・ティール・エス、ビジョン・コンサルティング、NJS、ビジョナル、オルタナ、楽天、ハウス食品、日本ハム、三菱食品、マルハニチロ、三洋貿易、長瀬産業、国分グループ本社、セブン・イレブン・ジャパン、オンワード樫山、マザーハウス、LIXIL、システナ、ユニリーバ・ジャパン、日本生命保険、損害保険ジャパン、東邦瓦斯、INPEX、日本放送協会（NHK）、テレビ信州、テレビ熊本、読売新聞社、日本経済新聞社、北海道新聞社、コ

ナミデジタルエンタテインメント、NTT ドコモ、KDDI、NTT データ、TIS、フリー (free)、伊藤忠テクノソリューションズ、ヤプリー、ソフトバンク、セコム、ファーストリテイリング、マイナビワークス、パーソルキャリア、ビズリーチ、CHINTAI、イオンモール、イオンリテール、オリエンタルランド、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、上組、郵船ロジスティクス、日本海事検定協会、日本鉄鋼連盟、東京都医学総合研究所、認定 NPO 法人かものはしプロジェクト、国家・地方公務員（会計検査院、外務省、経済産業省、厚生労働省、国土交通省、財務省、内閣官房、金融庁、都庁、県庁、市役所など）、東京大学（大学院農学生命科学研究科、新領域創成科学研究科）、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、神戸大学大学院国際協力研究科、エジンバラ大学大学院、サセックス大学大学院（開発学研究科、国際教育センター）、ロンドン大学大学院東洋アフリカ研究学院、イーストアングリア大学大学院国際開発学研究科、ブラッドフォード大学大学院平和学研究科、ジュネーブ国際・開発研究大学院、中央大学大学院（経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 中川 康弘 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

表面から内面へのまなざしの涵養―国際協力の文脈における「ことばの教育」の視点から

<授業の概要>

多様性の尊重、多文化共生の実現、他者への配慮は難しいです。私もいつも失敗ばかり。そんな私ですが、自分の弱さに向き合いつつ、日々考え、行動する中で、欲求は収まりません。ゼミを通じて、少しでもその最適解を探れたらと思っています。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力、教育、そして言語哲学の観点から「共生」への理解を深めます。見学調査やゲスト講義も行い、その実情を知ります。座学と議論、そして現場を往還する知的作業を通じて、4年次に至るまでの自分自身に潜在する固定観念を激しく揺さぶり、各自の興味を徹底的に掘り起こしていきます。学外の訪問先として、前期は都内の教育施設等を訪れ、多文化共生・グローバル社会に対する自らの考えを深めることを検討しています。ゲスト講義についても、与えられた身体条件からくる世界の見え方を一変させるコペルニクス的転回の機会が得られるゲストを予定しています。また方法論の基礎についても学び、少しずつ各自の研究課題を設定していきます。

後期はアジアの大学で日本語を学ぶ現地学生との共同調査等により、各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力としての言語文化・日本語教育の役割を考えていきます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。授業は履修者が用意したレジュメや調査結果についてディスカッションしながら進める双方向型で行います。

<活動内容>

演習Aでは、前期は『ヒューマニティーズ 外国語学』(岩波書店)を輪読した。そこで言語と世界との関係を学んだあと、種々の調査に臨んだ。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2025年6月16日(月)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：東京都庁第一本庁舎

実施内容：12月6日に行われる、東京都ダイバーシティ・プレゼンコンテスト打ち合わせ

成果：都庁関係者、他大学の学生および教員との会合が持てた

対象演習：A

実施日：2025年6月20日(金)

実施都市：東京都荒川区

実施場所：荒川区立第九中学校

実施内容：夜間学級の授業を見学、担当の副校長、主任と意見交換を行った

成果：文部科学省の施策の実情、および7割が外国人生徒であるという現状を知った

対象演習：A

実施日：2025年6月27日(金)

講演者：広瀬 浩二郎氏(国立民族学博物館 人類基礎理論研究部)

演題：コミュニケーションと社会

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F404 教室

実施内容：見えないゆえわかることがあるということを、見える人が理解する大切さを学ぶ

成果：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2025/06/81054/>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年8月3日(日)～2025年8月5日(火)

実施都市：山梨県甲府市

実施場所：公益社団法人やまなし観光推進機構

実施内容：毎年実施される「信玄公祭り」の外国人観光客の対応について学ぶ

成果：幅広く日本文化に興味を持つ外国人の存在と、そのかかわり方について学んだ

対象演習：A

実施日：2025年9月8日(月)～2025年9月13日(土)

実施都市：ダナン（ベトナム）

実施場所：ダナン外国語大学・他

実施内容：同大学学生たちとの意見交換や交流

成果：ベトナムと日本の関係についての理解が促進された

対象演習：A・B・C

実施日：2025年9月19日(金)

実施都市：東京都品川区

実施場所：学校法人明晴学園

実施内容：日本手話と日本語のバイリンガル校の授業見学と、校長の話

成果：日本手話は言語であるという主張と、その維持促進についての現場に触れた

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月20日(月)

実施都市：栃木県小山市

実施場所：株式会社きぼう国際外語学院

実施内容：技能実習生向けの日本語教育現場を知る

成果：動機の高さと、指導教員の教育観について触れることができた

対象演習：A・B・C

実施日：2025年12月6日(土)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：東京国際フォーラム

実施内容：第5回東京都ダイバーシティ・プレゼンコンテストへの参加

成果：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2025/12/83667/>

FLP演習B

<テーマ>

表面から内面へのまなざしの涵養―国際協力の文脈における「ことばの教育」の視点から

<授業の概要>

昨年度に続き、ことばや文化を軸に、人と人の水平的な関係、交流といった側面に着目します。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力、教育、そして言語哲学の観点から「共生」への理解を深めます。並行して見学調査も行い、現場の実情を体感します。演習Aで培った、座学と議論、そして現場を往還する知的作業からの学びをさらに精緻化させるべく、各自の興味を掘り起こしていきます。学外の訪問先として、前期は都内の公立中学校夜間学級を訪れ、多文化共生・グローバル社会に対する自らの考えを深めることを検討しています。同時に、方法論の基礎について学びつつ、各自が研究課題を設定します。

後期はアジアの大学で日本語を学ぶ現地学生との共同調査等により、各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力、日本語教育の役割を考えていきます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。授業は履修者が用意したレジュメや調査結果についてディスカッションしながら進める双方向型で行います。

<活動内容>

演習Bでは、『映像と旅する教育学』を読んだ。著者で教育社会学者の倉石一郎の筆致は、刺激に溢れ、『みかづき』『二十四の瞳』『破壊』『奇跡の人』『少年時代』『君たちはどう生きるか』などから当時の社会的背景を掘り下げ、現代の諸課題を往還させて議論できた。その後、種々の調査に臨んだ。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2025年5月13日(火)

講演者：月嶋 紫乃 氏（劇団トランス☆プロジェクト）

演 題：LGBTQと私たちの社会

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F404 教室

実施内容：多様なセクシュアリティへの理解と向き合い方の検討

成 果：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2025/05/80324/>

対象演習：B

実施日：2025年6月17日(火)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：国際交流基金本部オフィス

実施内容：日本文化と日本語の関係、文化発信の平和の意義について学ぶ

成 果：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2025/06/80975/>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年8月3日(日)～2025年8月5日(火)

実施都市：山梨県甲府市

実施場所：公益社団法人やまなし観光推進機構

実施内容：毎年実施される「信玄公祭り」の外国人観光客の対応について学ぶ

成 果：幅広く日本文化に興味を持つ外国人の存在と、そのかわり方について学んだ

対象演習：B

実施日：2025年9月1日(月)～2025年9月6日(土)

実施都市：台北市（台湾）

実施場所：公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所・他

実施内容：親日家と呼ばれる台湾の生の声を知る

成果：ラジオ局、NHK 支局、台中日本人学校等への訪問から、台湾理解が促進した

対象演習：A・B・C

実施日：2025年9月19日(金)

実施都市：東京都品川区

実施場所：学校法人明晴学園

実施内容：日本手話と日本語のバイリンガル校の授業見学と、校長の話

成果：日本手話は言語であるという主張と、その維持促進についての現場に触れた

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月20日(月)

実施都市：栃木県小山市

実施場所：株式会社きぼう国際外語学院

実施内容：技能実習生向けの日本語教育現場を知る

成果：動機の高さと、指導教員の教育観について触れることができた

対象演習：A・B・C

実施日：2025年12月6日(土)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：東京国際フォーラム

実施内容：第5回東京都ダイバーシティ・プレゼンコンテストへの参加

成果：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2025/12/83667/>

FLP演習C

<テーマ>

表面から内面へのまなざしの涵養―国際協力の文脈における「ことばの教育」の視点から

<授業の概要>

異質な言語と教育実践に触れ、そこに関わる具体的な他者との出会いの原体験が、国際理解の契機となって地球規模の諸問題の解決につながるという確信にもとづき、国際協力と日本語教育、多文化共生の意味を学んできた演習 A、B を経て、いよいよ演習 C の本授業において各自のテーマを理論化の俎上にまで高めます。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力、教育、そして言語哲学の観点から「共生」への理解を深めます。並行して見学調査も行い、現場の実情を体感します。演習 A、B で培った、座学と議論、そして現場を往還する知的作業からの学びをさらに精緻化させるべく、各自の興味を掘り起こしていきます。学外の訪問先として、前期は都内の公立中学校夜間学級を訪れ、多文化共生・グローバル社会に対する自らの考えを深めることを検討しています。

後期はアジアの大学で日本語を学ぶ現地学生との共同調査、大使館訪問等により、各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力、日本語教育の役割を考えていきます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。授業は履修者が用意したレジュメや調査結果についてディスカッションしながら進める双方向型で行います。

<活動内容>

演習 C では、『すき間の哲学』を読み、当事者の経験の心の中に入って思考するフィールドワーク手法を用いて、制度の網の目からこぼれる人に着目した。それをもとに以下の調査を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2025 年 5 月 15 日(木)

実施都市：東京都渋谷区

実施場所：東京ジャーミイ・ディヤナト トルコ文化センター

実施内容：イスラームへの理解促進

成果：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2025/05/80342/>

対象演習：A・B・C

実施日：2025 年 8 月 3 日(日)～2025 年 8 月 5 日(火)

実施都市：山梨県甲府市

実施場所：公益社団法人やまなし観光推進機構

実施内容：毎年実施される「信玄公祭り」の外国人観光客の対応について学ぶ

成果：幅広く日本文化に興味を持つ外国人の存在と、そのかかわり方について学んだ

対象演習：A・B・C

実施日：2025 年 9 月 19 日(金)

実施都市：東京都品川区

実施場所：学校法人明晴学園

実施内容：日本手話と日本語のバイリンガル校の授業見学と、校長の話

成果：日本手話は言語であるという主張と、その維持促進についての現場に触れた

対象演習：A・B・C

実施日：2025 年 10 月 20 日(月)

実施都市：栃木県小山市
実施場所：株式会社きぼう国際外語学院
実施内容：技能実習生向けの日本語教育現場を知る
成 果：動機の高さと、指導教員の教育観について触れることができた

対象演習：C
実 施 日：2025 年 10 月 28 日(火)～2025 年 11 月 2 日(日)
実施都市：ジャカルタ・バンドン（インドネシア）
実施場所：インドネシア教育大学・他
実施内容：インドネシアと日本、日本語教育のかかわりを学ぶ
成 果：イスラーム世界を知り、また日本語教育の意義について考えた

対象演習：A・B・C
実 施 日：2025 年 12 月 6 日(土)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：東京国際フォーラム
実施内容：第 5 回東京都ダイバーシティ・プレゼンコンテストへの参加
成 果：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2025/12/83667/>

(2) 林 光洋 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学 (Development Economics) に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学 (Development Studies) の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2025年度の2年生(演習A)は、開発経済学(2冊)、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計4冊使用して学習しました。過去数年にならい、2年次のグループ論文の準備を、それまでよりも前倒しにして前期末から始め、夏休みには研究の枠組み作りに本格的に取り組みました。

4つの班に分かれて、「参加型灌漑管理(PIM)プロジェクトの社会的持続性を高める条件—東南アジア4か国の事例分析—」、「サブサハラ・アフリカにおける感染症患者支援のmHealthの活用—アドヒアランスに着目した事例から—」、「モバイルマネーサービスによる女性の金融アクセスの格差縮小—ケニア M-Pesa の事例から—」、「CCTE(教育のための条件付き現金給付)による教育問題の解決—トルコにおけるシリア難民の事例から—」という4編のグループ論文を執筆しました。

対面およびオンラインで準備を重ね、12月開催のFLP国際協力プログラム期末成果報告会では、2年生論文の骨格にあたる部分を報告しました。その論文も最終的には2月に完成し、刊行することができました。

さらに、4年生(演習C)の訪問授業を手伝ったり、ユニセフ・プロジェクトに参加したりしました。例年通り、生協のフェアトレード・フェアを実施することができました。また、昨年度に続いて、図書館(国際機関資料室)とともに第3回の「フェアトレード展」(本年度のテーマは「フェアトレードの過去・現在・そして未来へ」)という共同企画を開催しました。その他、3年生(演習B)や4年生(演習C)が中心になって企画・準備し、実施した特別授業、セミナー、講演会等にも積極的に参加しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月16日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：中央大学高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：A・C

実施日：2025年10月29日(水)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属中学校・高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：A・C

実施日：2026年1月13日(火)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属中学校・高等学校

実施内容：中央大学附属高等学校の2年生の授業（SDGs）に参加し、12グループそれぞれのプロジェクトに対してコメントや情報を提供した。

成果：ウミガメ保護プロジェクト、自然廃材から広がるサステナブルな紙作り、子ども食堂と学生ボランティア等といった、林ゼミでは扱ってこなかったテーマでプロジェクトを行なっている生徒もおり、学生たちはコメントを提供したが、同時に新たな知識を多く得ることもできた。

FLP演習B

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2025年度の3年生（演習B）は、前期・後期ともに、3コマ連続する本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を行ないました。日本語のテキストとして『フィリピン—急成長する若き「大国」—』（井出穰治、2017年）、『なぜ貧しい国はなくなるのか—正しい開発戦略を考える—（第2版）』（大塚啓二郎、2020年）、『日本型開発協力とソーシャルイノベーション：知識創造が世界を変える』（野中郁次郎編、2024年）を、英語のテキストとして *Undernutrition in the Philippines: Scale, Scope, and Opportunities for Nutrition Policy and Programming*, (World Bank, 2021年) を輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。

林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう3年次1年間を使った研究プロジェクトも実施しました。2025年2月、2泊3日のキックオフの合宿で集中討議を行ない、そこで研究対象国をフィリピンに決め、3つのチームを設置し、研究プロジェクトをスタートさせました。奨学金の獲得、研究計画書の作成やその他の準備を苦戦しながらも進めることができました。現地調査出発前までに、オンラインを通じて、フィリピン側にインタビュー調査を実施したり、日本国内の関係する組織・団体を訪ねたりしました。

夏休み期間を利用して、2025年8月30日から9月13日までの14泊15日、フィリピンを訪ね、現地調査を実施しました。『フィリピンのベーシック・ヒューマン・ニーズ—地域住民の医・食・住に焦点を当てて—（Basic Human Needs in the Philippines: Focusing on Healthcare, Food, and Housing for Local Residents）』を全体の研究テーマに掲げ、その下で「メトロマニラにおける親への栄養教育による食行動改善—3つの要素に着目して—（Improvement in Dietary Behavior through Nutrition Education for Parents in Metro

Manila: Focusing on the Three Key Elements)」、「バランガイ・ヘルス・ワーカーの活動意欲とその実態—メトロマニラの事例— (Performance Motivation and Activities of Barangay Health Workers: A Case Study in Metro Manila)」、「インフォーマル居住者向けコミュニティ抵当事業においてソーシャル・キャピタルが住民の融資返済意欲向上にもたらす影響—メトロマニラの事例— (The Impact of Social Capital on Residents' Loan Repayment Motivation in the Community Mortgage Program: A Case Study in Metro Manila)」という3つのテーマの調査を行ないました。

現地調査終了後、経済学部のパレゼンテーション大会では、3つの班が出場し、2つの班が優勝、1つの班が準優勝しました。FLPの期末成果報告会でも、現地調査の結果を含む研究成果を発表しました。最終的に、英語版および日本語版の論文（合計約400ページ）を刊行することができました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2025年4月12日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中大杉並高校2年生約40人が受講している探究/グローバル・プロジェクトという授業に参加した。FACTメンバーがフェアトレードとFACTの紹介を行ない、その後、グループに分かれている高校生の中に入って、各グループがSDGs関連で1年間かけてどのようなプロジェクトを行なったらいいのかファシリテーターとしてアドバイスを行なった。

成果：高校生の今後のプロジェクトについて聞くことで、ゼミのメンバーは、自分たちよりも下の世代がどのようなことに関心を持っているのかについて知ることができた。また、高校生の各グループに対してプロジェクトについてアドバイスを行なう中で、これまでゼミで学んできたこと（計画の立て方、テーマの決め方、アポイントメントの取り方、開発経済学に関する知識等）を共有することができ、高校生のプロジェクトの質向上に貢献できた。

対象演習：B・C

実施日：2025年6月28日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加した。4月にも同じ授業に参加しており、今回は4月からの進捗状況を高校生の全グループに発表してもらった。その後、発表に対して学生側から質問したり、アドバイスしたりした。

成果：ゼミ学生たちにとっては、高校生の発表の中に初めて知る情報もあり、新たな知識を得ることができた。これまでゼミで学んできたことを活かして高校生にアドバイスを行なうことで、ゼミメンバー自身も学びをより確実にすることができた。

対象演習：B

実施日：2025年7月31日(木)

実施都市：埼玉県坂戸市、東京都文京区

実施場所：女子栄養大学、お茶の水女子大学

実施内容：栄養教育班のメンバーが、女子栄養大学の林英美先生およびお茶の水女子大学の赤松理恵先生の研究室を訪ね、研究計画を説明し、助言やコメントをもらった。

成果：KAP+S (Knowledge, Attitude and Practice+Skill) を用いると栄養教育の効果を測定できること、栄養教育を「正しい知識を教えること」ではなく、「対象者の

行動変容を支援するプロセス」]として捉えることが重要であることを学ぶことができた。

対象演習：B

実施日：2025年8月30日(土)～2025年9月13日(土)

実施都市：マニラ（フィリピン）

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）フィリピン事務所・他

実施内容：フィリピンで現地調査を実施した。その最終段階で、JICA フィリピン事務所では現地調査の結果を報告した。

成果：保健班、栄養教育班、住宅班がそれぞれのテーマにもとづき、調査対象とした機関・団体にアポイントメントをとったうえで訪問し、質問票・インタビュー調査を実施した。出発前に国内やオンラインで実施した調査では得ることのできなかった情報をフィリピンの各機関・団体から獲得できた。日程の最後には JICA フィリピン事務所を訪問し、現地調査の結果を発表し、それに対する職員の方からのフィードバックをもらうことができた。

対象演習：B

実施日：2025年9月1日(月)

講演者：Carlene Perpetua Pilar-Arceo 教授（フィリピン大学）

演題：フィリピン経済の構造と開発課題

実施都市：ケソン市（フィリピン）

実施施設：フィリピン大学 ディリマン校

実施内容：上記演題の講演をしてもらった。

成果：フィリピンの貧困、格差、ベーシック・ヒューマン・ニーズについて講演をしてもらい研究プロジェクトの全体のテーマでもあるそれらについて学びを深めることができた。講演で得た知識やアドバイスをもとに研究内容や質問票の内容を改善して、現地調査を実施することにつながった。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月16日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：中央大学高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：B・C

実施日：2025年11月29日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加し、高校生の成果に対して講評した。

成果：ゼミ学生たちにとって3回目で最終回の訪問となり、高校生たちの研究成果に対して講評を行なった。高校生たちは7グループあり、フェアトレード、外国人児童の日本語教育、子ども兵士の問題などさまざまなテーマを扱っていて、ゼミ学生にとっても学びの機会になった。

FLP演習C

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2025年度も前期・後期ともに、連続コマの本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を行いました。4年生（演習C）のメイン・タスクである修了論文については、しっかりとした研究計画書の作成と幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。最終的に、メンバー全員が修了論文を書きあげることができました。

修了論文の執筆に加えて、先輩たちから受け継がれ、伝統になっている高校向けの訪問授業プロジェクトとユニセフとのジョイント・プロジェクトを実施することができました。

2025年7月から11月にかけて、高校5校（浦和学院高校、中大高校、中大横浜高校、中大杉並高校、中大附属高校）を対象にして、対面による訪問授業/模擬授業を自主的に実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした途上国の開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えとともに、学生自身の知識の整理を行ないました。

本年度も中大杉並高校からの依頼で、同校2年生の探究授業の時間に実施しているグローバル・プロジェクトのために、2025年4月から11月にかけて3回、ゼミ学生たちが高校生に対して授業をしたり、最終の成果発表の際に講評をしたりしました。また、前年度に引き続き、2026年1月、中大附属高校のSDGsをテーマにした授業に参加し、高校生の研究成果に対して情報や助言、コメントを提供しました。本年度は、「夏の先生図鑑」という5つの高校から、夏休みを迎えたばかりの50人前後の高校生たちを対象に授業を行なう新企画も初めて実施しました。

例年通り、日本ユニセフ協会と連携して、10月から12月にかけて、共同講演会および募金活動を実施しました。前年度までの活動で得た知識・経験や本年度の活動の結果を、訪問授業、ユニセフとの共同講演会、FLP国際協力プログラム期末成果報告会等の中で発表しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2025年4月12日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中大杉並高校2年生約40人が受講している探究/グローバル・プロジェクトという授業に参加した。FACTメンバーがフェアトレードとFACTの紹介を行ない、その後、グループに分かれている高校生の中に入って、各グループがSDGs関連で1年間かけてどのようなプロジェクトを行なったらいいのかファシリテーターとしてアドバイスを行なった。

成果：高校生の今後のプロジェクトについて聞くことで、ゼミのメンバーは、自分たちよりも下の世代がどのようなことに興味を持っているのかについて知ることができた。また、高校生の各グループに対してプロジェクトについてアドバイスを行なう中で、これまでゼミで学んできたこと（計画の立て方、テーマの決め方、アポイントメントの取り方、開発経済学に関する知識等）を共有することができ、高校生のプロジェクトの質向上に貢献できた。

対象演習：C

実施日：2025年6月12日(木)

実施都市：東京都港区

実施場所：公益財団法人日本ユニセフ協会

実施内容：日本ユニセフ協会の本部で2025年度のプロジェクトの打ち合わせを行なった。

成果：双方の顔合わせを行ない、2025年度の共同プロジェクトの内容や方向性について具体的な話し合いを行なうことができた。特に、前年度の林ゼミでの研究成果を活かし、日本ユニセフ協会の活動とどのようにつなげていくかについて検討を進めることができた。共同講演会については、テーマ設定に関して意見を交換し、ゼミ生が主体となって準備を進める方向性を確認した。

対象演習：C

実施日：2025年6月19日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：中央大学高等学校

実施内容：2025年度の訪問授業の実施日時と授業内容について打ち合わせを行なった。

成果：授業実施日時を確定し、授業の内容について学生側の企画を説明して中央大学高等学校側の理解を得るとともに、先方の希望や注意事項を確認することができた。

対象演習：B・C

実施日：2025年6月28日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加した。4月にも同じ授業に参加しており、今回は4月からの進捗状況を高校生の全グループに発表してもらった。その後、発表に対して学生側から質問したり、アドバイスしたりした。

成果：ゼミ学生たちにとっては、高校生の発表の中に初めて知る情報もあり、新たな知識を得ることができた。これまでゼミで学んできたことを活かして高校生にアドバイスを行なうことで、ゼミメンバー自身も学びをより確実にすることができた。

対象演習：C

実施日：2025年6月30日(月)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属中学校・高等学校

実施内容：2025年度の訪問授業の実施日時と授業内容について打ち合わせを行なった。

成果：授業実施日時を確定し、授業の内容について学生側の企画を説明して中央大学附属高等学校側の理解を得るとともに、先方の希望や注意事項を確認することができた。

対象演習：C

実施日：2025年10月9日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：中央大学高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月16日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：中央大学高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：C

実施日：2025年10月17日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：中央大学附属横浜中学校・高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：C

実施日：2025年10月24日(金)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：A・C

実施日：2025年10月29日(水)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属中学校・高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：<https://econ-picks.r.chuo-u.ac.jp/2025-12-17-1648/>

対象演習：C

実施日：2025年11月6日(木)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：特定非営利活動法人八王子国際協会

実施内容：「日本語を母語としない児童生徒向けの日本語教育」をテーマにした修了論文執

筆に必要なインタビュー調査を実施した。

成 果：日本語を母語としない児童生徒向けの日本語指導や学習支援において、八王子国際協会のような NPO がどのような活動を行ない、どのような役割を果たしているのかについて確認することができた。

対象演習：C

実 施 日：2025 年 11 月 10 日(月)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：特定非営利活動法人八王子国際協会

実施内容：「日本語を母語としない児童生徒向けの日本語教育」をテーマにした、修了論文執筆に必要なインタビュー調査を追加的に実施した。

成 果：八王子国際協会による、学習支援教室の外国籍児童生徒の居場所づくりや、個別学習支援といった地域活動が八王子市の日本語教育施策の中に制度的に位置づけられているのかどうか、学校や教育委員会との間で統一的な指導方針や役割分担が共有されているのかどうか等、行政や学校との補完関係について確認することができた。

対象演習：B・C

実 施 日：2025 年 11 月 29 日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加し、高校生の成果に対して講評した。

成 果：ゼミ学生たちにとって3回目で最終回の訪問となり、高校生たちの研究成果に対して講評を行なった。高校生たちは7グループあり、フェアトレード、外国人児童の日本語教育、子ども兵士の問題などさまざまなテーマを扱っていて、ゼミ学生にとっても学びの機会になった。

対象演習：C

実 施 日：2025 年 12 月 8 日(月)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：八王子市教育センター

実施内容：「日本語を母語としない児童生徒向けの日本語教育」をテーマにした修了論文執筆に必要なインタビュー調査を実施した。

成 果：日本語の習得が不十分な児童生徒に対して、在籍校でどのように訪問指導が行なわれているのか、市内3校（由井第一小、南大沢小、打越中）に設置された日本語学級でどのように指導が行なわれているのかについて確認することができた。

対象演習：A・C

実 施 日：2026 年 1 月 13 日(火)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属中学校・高等学校

実施内容：中央大学附属高等学校の2年生の授業（SDGs）に参加し、12グループそれぞれのプロジェクトに対してコメントや情報を提供した。

成 果：ウミガメ保護プロジェクト、自然廃材から広がるサステナブルな紙作り、子ども食堂と学生ボランティア等といった、林ゼミでは扱ってこなかったテーマでプロジェクトを行なっている生徒もおり、学生たちはコメントを提供したが、同時に新たな知識を多く得ることもできた。

(3) 平澤 敦 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP 演習 A の平澤敦ゼミは、調査先をタイに決定し、3つのグループにより下記の研究テーマを設定して研究に取り組んだ。

- タイにおけるエコツーリズムの実態と課題
～持続可能なエコツーリズムについての考察と東南アジア諸国への応用可能性～
- Resilience to COVID-19 and Earthquakes: Insights from Japan and Thailand
- タイの観光政策の他国への応用可能性
～シンガポールとの比較から見る持続可能な観光モデル～

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年6月24日(火)～2025年6月25日(水)

実施都市：神奈川県足柄下郡

実施場所：村上二郎商店・他

実施内容：地域の観光の取り組みやマーケティングの特色などヒアリングし、宿泊施設にて全学年でディスカッションを実施した。

成果：各学年の研究テーマに関連づけて、効果的なフィードバックが得られた。

対象演習：A

実施日：2025年9月26日(金)～2025年10月2日(木)

実施都市：バンコク (タイ)

実施場所：独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO) バンコク事務所・他

実施内容：研究テーマに関連して、JETRO や法律事務所、さらにはタマサート大学にて、レクチャーならびに質疑応答。

成果：効果的なフィードバックが得られ、その内容をふまえて期末成果報告会にて全グループ発表を行った。

対象演習：A・B

実施日：2025年12月1日(月)

講演者：糸田 智次 氏 (株式会社コネクトメディア)

演題：外国語が不得手な場合におけるビジネスマン・ビジネスウーマンの海外ビジネス術

実施施設：中央大学 多摩キャンパスフォレスト館 F408 教室

実施内容：講師の経験から得られた海外におけるビジネスの成功要因・失敗要因の実例のレクチャー。当初の時間を大幅に超えて150分近い講義となった。

成果：講義のなかで、講師からケーススタディについてのQをグループにわかれて考察する時間を設けて、グループの見解を発表するという形式により、全員参加型のディスカッションが行われ、効果的なアクティブラーニングが行われた。

FLP 演習 B

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP 演習 B の平澤敦ゼミは、調査先をタイに決定し、3つのグループにより下記の研究テーマを設定して研究に取り組んだ。

- タイと日本における BL 文化および LGBTQ+ 社会的需要の関係
- 災害補償の迅速性・公平性とアカウンタビリティの透明性と両立可能性
～タイの自然災害保険基金の例から学ぶ～
- The Crucial Aspects of ESG Management in Emerging Economies: Do ESG efforts help companies in Thailand to enhance corporate value?

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年6月24日(火)～2025年6月25日(水)

実施都市：神奈川県足柄下郡

実施場所：村上二郎商店・他

実施内容：地域の観光の取り組みやマーケティングの特色などヒアリングし、宿泊施設にて全学年でディスカッションを実施した。

成果：各学年の研究テーマに関連づけて、効果的なフィードバックが得られた。

対象演習：B

実施日：2025年9月8日(月)～2025年9月14日(日)

実施都市：バンコク（タイ）

実施場所：独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）バンコク事務所・他

実施内容：パンヤピワット経営大学でのグループワーキングやイベントに参加。中央大学バンコク白門会による懇親会への参加。JETROでのレクチャーおよび質疑応答。

成果：効果的なフィードバックが得られ、その内容をふまえて期末成果報告会にて全グループ発表を行った。

対象演習：A・B

実施日：2025年12月1日(月)

講演者：糸田 智次 氏（株式会社コネクトメディア）

演題：外国語が不得手な場合におけるビジネスマン・ビジネスウーマンの海外ビジネス術

実施施設：中央大学 多摩キャンパスフォレスト館 F408 教室

実施内容：講師の経験から得られた海外におけるビジネスの成功要因・失敗要因の実例のレクチャー。当初の時間を大幅に超えて150分近い講義となった。

成果：講義のなかで、講師からケーススタディについてのQをグループにわかれて考察する時間を設けて、グループの見解を発表するという形式により、全員参加型のディスカッションが行われ、効果的なアクティブラーニングが行われた。

FLP演習C

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP演習Cの平澤敦ゼミは、調査先を香港に決定し、2つのグループにより下記の研究テーマを設定して研究に取り組んだ。

- POP MARTの成功要因と市場の構造分析
- 中国のコンテンツファイナンスの課題
～香港映画にフォーカスして～

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年6月24日(火)～2025年6月25日(水)

実施都市：神奈川県足柄下郡

実施場所：村上二郎商店・他

実施内容：地域の観光の取り組みやマーケティングの特色などヒアリングし、宿泊施設にて全学年でディスカッションを実施した。

成果：各学年の研究テーマに関連づけて、効果的なフィードバックが得られた。

対象演習：C

実施日：2025年11月10日(月)～2025年11月15日(土)

実施都市：香港（中国）

実施場所：独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）香港事務所・他

実施内容：コンテンツファイナンス・POP MARTの戦略などにつき現地在住のOBも含めてヒアリングを実施した。

成果：効果的なフィードバックが得られ、その内容をふまえて期末成果報告会にて2つのグループ共に発表を行った。

(4) 新原 道信 (文学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えしました。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめました。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。今年度も、ヨーロッパやアジアに留学中のゼミ生と連絡をとりあいつつゼミをすすめました。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していきました。

マレーシアを2025年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意し、事前調査と事後調査に力をいれました。全ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でフィールドワークを実施しました。国内では新大久保や高田馬場の多文

化社会、マレーシアではクアラルンプールの多文化社会を主要なフィールドとして、研究テーマごとに ABC 生合同の班に分かれて、国立博物館、中央市場、独立広場、国立モスク、イスラム美術館、リトル・インディア他でフィールドワークを行いました。後期には期末成果報告会があり、報告会に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を行いました。期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書『異郷の地マレーシアに立つ：多文化社会を見つめるフィールドワーク』（総頁数 252 頁）を、全員の協力でとりまとめました。

A 生は、BC 生や院生からのアドバイスにもとづき、マレーシア調査実施後の 2025 年度後期からゼミの運営を担い、来年度の台湾調査を実現させるため、春休み期間の課題、現地へ行くための準備等を怠らずに進めています。

<実態調査>

対象演習：A・B・C

実施日：2025 年 8 月 5 日(火)～2025 年 8 月 9 日(土)

実施都市：クアラルンプール（マレーシア）

実施場所：国立博物館、中央市場、独立広場、国立モスク、イスラム美術館、リトル・インディア・他

実施内容：ABC 生合同の班をテーマごとに複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスト〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ (composite community with heterogeneity)” の条件についての考察を深めた。

<成果報告書の概要>

『異郷の地マレーシアに立つ：多文化社会を見つめるフィールドワーク』

第 1 編 新原ゼミの考える国際協力 今年度の歩み

第 2 編 各班調査報告

視座の複雑性班

社会問題班

食文化班

都市班

第 3 編 今年度の総括及び今後の展望

FLP演習B

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えしました。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめました。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。今年度も、ヨーロッパやアジアに留学中のゼミ生と連絡をとりあいつつゼミをすすめました。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していきました。

マレーシアを2025年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意し、事前調査と事後調査に力をいれました。全ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でフィールドワークを実施しました。国内では新大久保や高田馬場の多文化社会、マレーシアではクアラルンプールの多文化社会を主要なフィールドとして、研究テ

マごとに ABC 生合同の班に分かれて、国立博物館、中央市場、独立広場、国立モスク、イスラム美術館、リトル・インディア他でフィールドワークを行いました。

B 生は、前期と夏期のマレーシア調査までの期間、ゼミでの調査研究活動の中心となり、国内フィールドワークの調査計画、マレーシアでの調査計画の立案と実行、班単位の行動計画の調整などを担当しました。後期には期末成果報告会があり、報告会に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を、行いました。期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書『異郷の地マレーシアに立つ：多文化社会を見つめる フィールドワーク』（総頁数 252 頁）を、全員の協力でとりまとめました。

<実態調査>

対象演習：A・B・C

実施日：2025 年 8 月 5 日(火)～2025 年 8 月 9 日(土)

実施都市：クアラルンプール（マレーシア）

実施場所：国立博物館、中央市場、独立広場、国立モスク、イスラム美術館、リトル・インディア・他

実施内容：ABC 生合同の班をテーマごとに複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスト〉を定めてフィールドワークを実施した。

成 果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ (composite community with heterogeneity)” の条件についての考察を深めた。

<成果報告書の概要>

『異郷の地マレーシアに立つ：多文化社会を見つめるフィールドワーク』

第 1 編 新原ゼミの考える国際協力 今年度の歩み

第 2 編 各班調査報告

視座の複雑性班

社会問題班

食文化班

都市班

第 3 編 今年度の総括及び今後の展望

FLP演習C

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えしました。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめました。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。今年度も、ヨーロッパやアジアに留学中のゼミ生と連絡をとりあいつつゼミをすすめました。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していきました。

マレーシアを2025年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意し、事前調査と事後調査に力をいれました。全ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でフィールドワークを実施しました。国内では新大久保や高田馬場の多文化社会、マレーシアではクアラルンプールの多文化社会を主要なフィールドとして、研究テ

マごとに ABC 生合同の班に分かれて、国立博物館、中央市場、独立広場、国立モスク、イスラム美術館、リトル・インディア他でフィールドワークを行いました。

C 生は、AB 生へのアドバイスを中心的に行い、国内・マレーシア調査の計画立案・実施をサポートしました。2025 年度後期からゼミの運営を担うようになった A 生にもアドバイスし、2026 年度に予定されている台湾調査についても、2024 年度台湾調査からの知見を提供してくれました。期末成果に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を行い、期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書『異郷の地マレーシアに立つ：多文化社会を見つめるフィールドワーク』（総頁数 252 頁）を、全員の協力でとりまとめました。

<実態調査>

対象演習：A・B・C

実施日：2025 年 8 月 5 日(火)～2025 年 8 月 9 日(土)

実施都市：クアラルンプール（マレーシア）

実施場所：国立博物館、中央市場、独立広場、国立モスク、イスラム美術館、リトル・インディア・他

実施内容：ABC 生合同の班をテーマごとに複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスト〉を定めてフィールドワークを実施した。

成 果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ (composite community with heterogeneity)” の条件についての考察を深めた。

<成果報告書の概要>

『異郷の地マレーシアに立つ：多文化社会を見つめるフィールドワーク』

第 1 編 新原ゼミの考える国際協力 今年度の歩み

第 2 編 各班調査報告

視座の複雑性班

社会問題班

食文化班

都市班

第 3 編 今年度の総括及び今後の展望

(5) 山田 恭稔 (国際経営学部・教授)

F L P 演習 A・B

<テーマ>

開発社会学を通して東南アジアを捉える

<授業の概要>

開発社会学の視点から、東南アジア地域での貧困や格差に関連する多岐にわたる開発課題あるいは社会問題に対する政策や国際協力について、地域社会を軸に研究する。また、東南アジア諸国が抱える開発課題や社会問題に対する政策および試み、ならびにそれらが地域社会にもたらした影響について学びを深めながら、開発社会学の視点や考え方の基礎を批判的思考を通して習得する。

本演習 AB は、ゼミ生が専門知識だけではなく、発表や討議をも含んだチームワークの経験を積み、協調性、自己管理能力を修得し、また、フィールドワークに基づいたレポートや演習論文の作成などを通じ、総合的な学習体験と知的複眼思考力を修得することに関わる。

【A 生】

本演習 A では、輪読を行ないつつ、関心テーマに基づくグループ研究を、東南アジアでの実態調査ならびに日本国内での聞き取り調査と合わせて進め、論文を作成する。

【B 生】

本演習 B では、輪読を行ないつつ、東南アジアでの実態調査と合わせて、論文を作成する。

<活動内容>

山田ゼミでは、輪読とグループ研究という相互補完的に作用する 2 つの活動の両輪を並行させながら、ゼミ生たちが主体となった研究活動を進めました。また、学年を超えた親睦と協力を深め、そして、積極的な討議や活発な意見交換、チームワークに基づく多岐にわたった有意義なゼミ活動を生み出す礎も築けました。

輪読では、国際協力や国際開発をめぐる、特に参加型開発に関してや、国際協力を批判的に捉える文献から学びを深めました。また、観光と開発をめぐる、包括的な成長に関してや、自律的観光を扱った論文にも触れました。

ゼミ生たち自らの研究として、インドネシアと日本の事例に基づいた Community-Based Tourism (CBT) をテーマにグループ研究が行なわれました。年度始めより試行錯誤を重ねながら研究の枠組み作りに取り組み、その精度を徐々に上げる一方で、インドネシアでの実態調査に向けた準備を進め、8 月上旬に実施し、その後収集した情報を分析しました。さらに、11 月半ばには、日本の事例研究を深めるために、長崎さるく関係者へのオンライン・インタビューも実施しました。A ゼミ生が中心となったこれらのインタビューや実態調査からは、CBT の現場に実際に携わったり、その実態を深く知る人々からの話や言葉に触れる貴重な機会を得ることができ、分析を深めることができました。そして、それらの結果をグループ研究という形で論文にまとめ上げることができました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2025 年 6 月 30 日(月)

講演者：下田 道敬 氏 (独立行政法人国際協力機構 (JICA) 国際協力専門員)

演 題：開発協力の現場から見た、その現実と希望：日本の二国間協力の挑戦

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：国際協力の現場では、開発援助の推進が途上国とそこに生きる人々が主体性や内発性の喪失をもたらすという「開発協力のパラドックス」をしばしば生み出してしまいます。途上国とそこに生きる人々が主体性や内発性を回復し、地域社会や住民たちが真の意味で主体的な開発を進めるにはどのようなことが重要なのかに

ついて、講師が国際協力の現場に身を置いて、感じてきたこと、考えてきたことを語っていただきました。

成 果：A・B 生たちによる Community-Based Tourism (CBT) に関するグループ研究においても、地域社会や住民たちが主体的でかつ持続的に活動し続けるための要因とその機能や仕組みへの注目が求められています。今回の授業を通して、当該ゼミ生たちは、真の意味で主体的な開発を進めるための要因という視点とその機能について理解を深めることができました。

対象演習：A・B

実 施 日：2025 年 8 月 3 日(日)～2025 年 8 月 9 日(土)

実施都市：ジャカルタおよびバンドン県（インドネシア）

実施場所：Indecon Office、Padjadjaran University、Bandung Regency Government Education Authorities Office、Al Ittifaq Islamic Boarding School/Cooperative・他

実施内容：インドネシアにおける Community-Based Tourism (CBT) に関する実態調査と情報収集を目的として、首都ジャカルタのみならず地方都市バンドンを訪れ、CBT の実践現場の実態を調査し、CBT に関係する諸組織ならびに実際に携わっている団体や人々から聞き取りを行ないました。

成 果：地方都市を単に訪れるだけではなく、同都市からさらに足を伸ばして CBT が実践されている現場を訪れ、移動手段、食事、宿泊施設、土産物など多岐にわたった実態を垣間見たり体験できたことは、インドネシアにおける CBT の現状把握にとってとても意義深かったです。また、CBT を支援する行政機関や NGO のみならず、観光業に実際に携わっている団体や人々から得られた様々な情報は、インドネシアにおける CBT の現状と課題に対する理解を深めることに役立ちました。



Indecon での聞き取り



阪急阪神エクスプレス事務所で
宮本氏からインドネシアでの
経験談をうかがう



バンドン県事務所での聞き取り



協同組合での包装作業の様子



路上での住民からの聞き取り



昼食のインドネシア料理を前に

FLP演習C

<テーマ>

開発社会学を通して東南アジアを捉える

<授業の概要>

開発社会学の視点から、東南アジア地域での貧困や格差に関連する多岐にわたる開発課題あるいは社会問題に対する政策や国際協力について、地域社会を軸に研究する。東南アジア諸国で実施されたそれらの開発政策ならびに地域社会へのその影響について学びながら、開発社会学の視点や考え方の基礎を批判的思考を通して習得する。

本演習Cでは、専門知識だけではなく、発表や討議をも含んだチームワークの経験を積み、協調性、自己管理能力を修得し、また、フィールドワークに基づいたレポートや演習論文の作成などを通じ、総合的な学習体験と知的複眼思考力の修得に関わる。

<活動内容>

山田ゼミでは、輪読と修了研究という相互補完的に作用する2つの活動の両輪を並行させながら、ゼミ生たちが主体となった研究活動を進めました。さらに、Cゼミ生は、A・B生たちに頻繁に声を掛けたりアドバイスを授けてくれました。Cゼミ生のこの尽力により、学年を超えた親睦と協力が深まり、積極的な討議や活発な意見交換を含む多岐にわたった有意義なゼミ活動を生み出すことができました。

輪読では、国際協力や国際開発に関してのみならず、東南アジアの社会や政治に関する文献から学びました。

演習Cでの個々人の研究活動として、所属学部での卒業論文テーマ（在住外国人子女の教育問題）と、当ゼミでの経験も活かしたテーマ（国際協力と地域づくり）という2つが、相互からの刺激と学び合いを通して深められました。また、Cゼミ生たちは10月下旬に山口県下関市へ赴き、国際協力と地域づくりをめぐる実態調査も行ない、現場に実際に携わったり、実態を深く知る人々からの話や言葉に触れる貴重な機会を得ることができました。そして、修了研究という形で論文にまとめ上げることができました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年6月30日(月)

講演者：下田 道敬 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力専門員）

演 題：開発協力の現場から見た、その現実と希望：日本の二国間協力の挑戦

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：国際協力の現場では、開発援助の推進が途上国とそこに生きる人々が主体性や内発性の喪失をもたらすという「開発協力のパラドックス」をしばしば生み出してしまいます。途上国とそこに生きる人々が主体性や内発性を回復し、地域社会や住民たちが真の意味で主体的な開発を進めるにはどのようなことが重要なのかについて、講師が国際協力の現場に身を置いて、感じてきたこと、考えてきたことを語っていただきました。

成 果：今回の授業を通して、真の意味で主体的な開発を進めるための要因という視点とその機能について、C生たちは理解を深めることができました。

対象演習：C

実施日：2025年10月28日(火)～2025年11月1日(土)

実施都市：山口県下関市

実施場所：下関市総合政策部国際課、しものせき多文化ひろば、しものせき国際交流ねっと、特定非営利活動法人にほんごコミュニティ、青年海外協力隊OB会、山口県青年国

際交流機構、株式会社リージョナルマネジメント・他

実施内容：下関市では、姉妹都市をはじめとした都市間の交流のみならず、市民による草の根・民間レベルでの多様な国際交流が行われています。市民による国際交流の現状を把握しながら、国際交流がどのように地方創生へと関わっているのかについて、行政職員や関係する諸団体などから聞き取り調査を行ないました。

成果：下関市が持つユニークな歴史的背景にも裏打ちされた様々な国際交流のあり方を理解することができました。一口に「国際交流」と言っても、目的、関わる人々、活動内容などは千差万別であり、地域社会の中で「国際交流」が重層的に実施されている実態を掴むことができました。そして、「国際交流」が地方創生にどのような影響をもたらし得るのかについても、「国際交流」の多様な姿を一つずつ具体的に紐解きながら、その可能性を探る必要性を痛感しました。



下田 JICA 専門員による特別授業



下関市役所での聞き取り



市民グループ代表からの聞き取り



NPO 代表者からの聞き取り



青年海外協力隊 OB からの聞き取り



在住外国人へのアンケート調査

(6) 中村 俊之 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP演習A

<テーマ>

変わりゆく世界と新たな国際協力のありかた

<授業の概要>

途上国が直面する諸課題は、近年ますます複雑化・グローバル化しつつあり、途上国のみの課題として解決することが困難になっています。環境問題等に代表されるグローバルな課題の解決に際しては、国を超えて解決策を見出す必要があります。また、途上国の抱える課題と日本の地域社会が抱える課題について、互いの共通点や相違点を見出すことにより、双方向での学びを深め、解決に導いていく可能性も検討され始めています。

本ゼミでは、国際協力の基本的な考え方や課題を学びつつ、これまでの一方向的な「開発援助」ではなく、受益者のオーナーシップを重視した双方向の「開発協力」の優位性について理解を深め、新しい国際協力のあり方について共に考えていきます。

<活動内容>

当ゼミでは、導入として、世界の実情を客観的なデータに基づき俯瞰することの重要性を理解することから開始しました。学生のもつ先入観が、いかにグローバル・サウス諸国の実情を正しく理解する妨げになっているかを認識し、ファクトに基づいて当該国・地域を把握することの難しさと重要性の理解に努めました。また、国際協力と開発協力の歴史、日本のODAの仕組みとその実施の考え方の根幹となる「開発協力大綱」の理解を深めるため、グループごとの発表を行いました。

夏休みのゼミのフィールド調査を長井市で行うことに決定し、それに向けた課題発見から課題解決に導く手法の一つとして、PDM (Project Design Matrix) 手法を理解し、使用できるレベルに到達することを前期の目標に定めました。同手法を机上で学んだ後、架空の国・地域における課題の特定と、その解決のためのプロジェクト立案をチームごとに行いました。その際に必要となるコミュニケーションスキルの向上についても、実践形式で取り組みました。同時に、フィールドとなる長井市についての理解を深めるべく、チームごとに町の実情に関する文献調査を行うなど、現地調査の準備を進めました。また、前期終盤には、TICAD9が横浜で開催されることを念頭に、アフリカ開発に関する知識を深めるための集中講義を実施しました。次年度は、アフリカについてより詳細に学ぶ機会を提供する予定です。

夏休みには、後述のとおり長井市での現地調査を実施し、後期は主に調査結果の取りまとめを中心にゼミを実施しました。また、夏休み期間中には、後述のとおり横浜で開催されたTICAD9で登壇したB生のプレゼンを傍聴する機会も設けました。

後期には、JICA横浜での見学調査を行い、移民や多文化共生について考える機会を設けるとともに、海外協力隊の体験談を聴講しました。調査結果の取りまとめに際しては、PDM手法を用いて、「問題分析」「関係者分析」「目的分析」、さらに課題解決のための「プロジェクトの選定」という、国際協力プロジェクトを組成していく際に実際に用いる手法をチームごとに進め、途中段階でチーム間の議論も交えながら、より精度の高いものとするプロセスを実施しました。アイデアをより実効性の高いものにするために必要な要素、具体的には予算、人員、主体となる住民の理解などの必要性の理解に努めました。なお、成果発表会の前には、長井市職員に対するゼミ生からのプレゼンを実施し、実践的なコメントやアドバイスをいただいて発表資料のブラッシュアップを行い、成果発表会に臨みました。

当ゼミでは1年間かけて「国際協力の基本概念の体系的理解」、「課題分析（問題分析／関係者分析／目的分析）能力の向上」、「PDMを用いたプロジェクト設計力の習得」、「協働作業を通じた主体性・オーナーシップの醸成」、「国内地域課題と途上国課題の接続的理解」に取り組みました。国際協力において最も重要な考え方の一つである「オーナーシップ」と「パートナーシップ」を体現することを目標に掲げていますが、ゼミ発足当初は、初めて顔を合わせる学生同士ということもあり、教室以外でのコミュニケーションはほとんど行われていま

せんでした。しかし、課題などの協働作業を通じて、少しずつゼミ生同士の議論が活発化しつつあり、ゼミ生が自律的にゼミを運営する体制が整ってきました。この春休みには、来年度の海外現地調査に向けたB生による講義や、輪読のための2日間の自主ゼミ開催などを契機に、ゼミ生のオーナーシップがさらに高まることが期待されます。来年度は、ゼミ生がより主体的にゼミ活動を運営するとともに、新2年生への指導的役割も担うことを期待しています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2025年8月20日(水)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル パールルーム

実施内容：B生のルワンダ渡航体験をTICAD9関連イベントで発表することとなったため、A生も可能な限りオブザーバーとして参加しました。

成果：B生はルワンダから帰国して2日後に大学で自主ゼミを行い、プレゼンの準備と予行練習を経て当日の発表に臨みました。アフリカからのゲストや他大学の教員、政治関係者の前で、ルワンダ渡航で学んだこと、そして今後チャレンジしたいことを自分たちの言葉で発表しました。終了後は他大学の学生やアフリカからの留学生との交流会にも参加し、国際交流を深めました。A生にとっても、他大学のプレゼンや展示ブースの見学、アフリカで活動する日系企業関係者からの聞き取り等を通じて、得難い学びの機会となりました。

対象演習：A

実施日：2025年9月9日(火)～2025年9月12日(金)

実施都市：山形県長井市

実施場所：長井市役所・他

実施内容：前期の文献調査を補足するため、市長をはじめとする市役所関係者へのヒアリング、班ごとの関係先訪問、町民との交流等を実施しました。

成果：市役所では市長等との意見交換を行うとともに、担当者から市の開発計画の概要について講義を受けました。また、観光班・産業班の2班に分かれ、それぞれの分野の関連施設（道の駅、スマートストア、コミュニティセンター、地元中堅企業等）を訪問し、ヒアリングを実施しました。最終成果として、市の人口減少の緩和や関係人口の増加に資すると考えられる3件のプロジェクト(案)を策定し、市役所関係者に対してプレゼンテーションを行い、助言を得ました。ゼミ生は、市の課題に向き合い具体的解決策を模索することの意義と難しさを体感しました。

対象演習：A・B

実施日：2025年10月13日(月)

講演者：渡守 麻衣 氏（長岡技術科学大学 国際産学連携機構産学官連携コーディネーター）

演題：グローバルに働くためのキャリア形成

実施施設：中央大学 多摩キャンパス GG601

実施内容：新聞記者、外務省職員、JICA 専門家など多様なキャリアを経験した同氏から、仕事の内容や職業との向き合い方について講義を受け、その後質疑応答を行いました。

成果：学生にとって、今後の進路を考える上で有益な機会となりました。

対象演習：A

実施日：2025年11月28日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜

実施内容：横浜センター業務概要講義および海外移住資料館ガイド付き見学

成 果：横浜センター担当者から、ODA および JICA 事業の概要、ODA 実施の意義等について講義を受け、国際協力全般に関する理解を深めました。また、海外移住資料館の見学を通じ、かつて日本から北米・中南米へ移住した日本人の歴史と苦難を学ぶとともに、現在来日している外国人材の状況にも思いを致す機会となりました。日本の人口減少・少子高齢化の進展を踏まえ、多文化共生の重要性についてゼミ生が深く考察する契機となりました。

対象演習：A・B（次年度 A ゼミ生も任意参加）

実 施 日：2025 年 12 月 15 日（月）

講 演 者：梁瀬 直樹 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）前アフリカ部長）

演 題：TICAD9 の成果と課題

実施施設：中央大学 多摩キャンパス GG604

実施内容：TICAD9 の成果の振り返りおよび JICA アフリカ・ホームタウンの経緯等について講義を受け、その後質疑応答を行いました。

成 果：学生にとって、アフリカに対する国際協力をより深く考える契機となりました。



（A 生 長井市複合施設くると視察）



（A 生 長井市長表敬訪問）

FLP演習B

<テーマ>

変わりゆく世界と新たな国際協力のありかた

<授業の概要>

途上国が直面する諸課題は、近年ますます複雑化・グローバル化しつつあり、途上国のみの課題として解決することが困難になっています。環境問題等に代表されるグローバルな課題の解決に際しては、国を超えて解決策を見出す必要があります。また、途上国の抱える課題と日本の地域社会が抱える課題について、互いの共通点や相違点を見出すことにより、双方向での学びを深め、解決に導いていく可能性も検討され始めています。

本ゼミでは、国際協力の基本的な考え方や課題を学びつつ、これまでの一方向的な「開発援助」ではなく、受益者のオーナーシップを重視した双方向の「開発協力」の優位性について理解を深め、新しい国際協力のあり方について共に考えていきます。

<活動内容>

B 生は春休みの間に複数回の自主ゼミを開催し、アフリカ渡航候補国の検討・絞り込みを行い、渡航国をルワンダに決定しました。

4 月に入り、それぞれの関心セクターを絞り込むため、20 の JICA Global Agenda (JGA) の中から各自が関心領域を取り上げてプレゼンを行い、途上国の課題についての理解を深めるとともに、現地での調査領域を確定しました。ゼミ生はそれぞれの関心分野に基づき、保健、ICT、平和構築の 3 班に分かれ、ルワンダの概要とともに当該国の関連セクターに関する文献調査を進めました。この過程において、関連分野の専門家へのヒアリングや、ICT 班による国内イノベーション・ハブの視察を行うなど、準備を進めました。現地での調査先へのメールベースでのアポイント取得は、返信が得られないなど想像以上に難しい面もありましたが、事前調査を踏まえ、現地での調査事項を整理するよう努めました。

現地調査については後述のとおりですが、1 名を除き初めてアフリカに渡航したゼミ生にとって、渡航前に想像・理解していたアフリカと、現地で自ら体験したアフリカとの違いから、多くを学ぶことができました。

帰国後は夏休み期間中ではありましたが、TICAD9 学生イベントへの登壇準備を進め、後述のとおり、ルワンダでの学びを発表する機会を得ました。

夏休み明けからは、輪読と並行して期末成果発表会に向けた準備を行いました。当初は仮説に基づく検証を行うべく渡航した各班でしたが、最終的には、学生が現地で目の当たりにした課題の解決に向けたプロジェクト提案を行う方針で準備を進めました。準備を進めるにあたり、2 年次に習得した PCM 手法を活用しつつ、国内の有識者やルワンダで知り合った若手起業家とも意見交換を行いながら、各班で提案プロジェクトの策定を行いました。また、成果発表会の直前には、JICA ルワンダ事務所および JICA アフリカ部とリモートで接続し、コメントをいただく機会を得て、提案プロジェクトの精緻化を図りました。

この一年間でゼミ生の「実地調査に基づく課題発見力」「PCM を用いたプロジェクト形成能力」、ルワンダ渡航による「異文化環境への適応力・応用力」も相当程度向上しました。帰国後もゼミ生が能動的にプロジェクトを実現する手立てを考え、議論する姿勢にも成長の跡を垣間見ることができました。

ゼミ生は、現地調査で学んだことを踏まえて具体的なプロジェクトにつなぐ模索を始めており、来年度は、彼ら自身の手で具体的な活動の一つでも二つでも実践することで、国際協力の難しさと楽しさへの理解をさらに深めるとともに、ゼミの後輩に失敗も成功も含めた貴重なアセットを引き継ぐことを期待しています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2025 年 8 月 2 日(土)～2025 年 8 月 11 日(月)

実施都市：キガリ市（ルワンダ共和国）

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）ルワンダ事務所・他

実施内容：現地では JICA ルワンダ事務所において塩塚所長ほかからブリーフィングを受けたほか、JICA 海外協力隊、水関連施設、タンザニア国境施設等の視察を実施しました。平和構築班は虐殺当事者へのインタビュー、虐殺博物館、被害当事者が運営するクラフトショップ等の視察を実施しました。ICT 班は現地専門家からのヒアリングおよびイノベーション・ハブにおけるワークショップ（WS）参加を行いました。保健班は現地の小・中学校等を訪問し、聞き取り調査を実施しました。

成 果：アポイント調整の困難等、現地特有の課題に直面しつつも、その都度最適な対応を検討・実行する中で、異文化環境への適応力を養うことができました。また、文献情報と現地実態とのギャップを実感するとともに、相手国を一つの「国」としてではなく、そこに暮らす一人一人の人間として理解しようとする姿勢の重要性を体得しました。これらは国際協力の本質を学ぶ上で大きな成果となりました。

対象演習：A・B

実施日：2025 年 8 月 20 日（水）

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル パールルーム

実施内容：B 生のルワンダ渡航体験を TICAD9 関連イベントで発表することとなったため、A 生も可能な限りオブザーバーとして参加しました。

成 果：B 生はルワンダから帰国して 2 日後に大学で自主ゼミを行い、プレゼンの準備と予行練習を経て当日の発表に臨みました。アフリカからのゲストや他大学の教員、政治関係者の前で、ルワンダ渡航で学んだこと、そして今後チャレンジしたいことを自分たちの言葉で発表しました。終了後は他大学の学生やアフリカからの留学生との交流会にも参加し、国際交流を深めました。A 生にとっても、他大学のプレゼンや展示ブースの見学、アフリカで活動する日系企業関係者からの聞き取り等を通じて、得難い学びの機会となりました。

対象演習：A・B

実施日：2025 年 10 月 13 日（月）

講演者：渡守 麻衣 氏（長岡技術科学大学 国際産学連携機構産学官連携コーディネーター）

演 題：グローバルに働くためのキャリア形成

実施施設：中央大学 多摩キャンパス GG601

実施内容：新聞記者、外務省職員、JICA 専門家など多様なキャリアを経験した同氏から、仕事の内容や職業との向き合い方について講義を受け、その後質疑応答を行いました。

成 果：学生にとって、今後の進路を考える上で有益な機会となりました。

対象演習：A・B（次年度 A ゼミ生も任意参加）

実施日：2025 年 12 月 15 日（月）

講演者：梁瀬 直樹 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）前アフリカ部長）

演 題：TICAD9 の成果と課題

実施施設：中央大学 多摩キャンパス GG604

実施内容：TICAD9 の成果の振り返りおよび JICA アフリカ・ホームタウンの経緯等について講義を受け、その後質疑応答を行いました。

成 果：学生にとって、アフリカに対する国際協力をより深く考える契機となりました。



(B 生 ルワンダ・ルスモ国境施設の視察)



(B 生 ルワンダ JICA 海外協力隊員の活動現場視察)

(7) 戸川 正人 (全学連携教育機構・客員教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

国内課題と接続する国際協力の再構築

—共創と環流の理論的統合—

<授業の概要>

本演習 A では、国際協力を国外の問題としてのみ扱うのではなく、日本社会が直面する構造的課題と接続しながら再考することを目的としました。国際協力を学ぶ際、途上国の貧困、教育格差、保健医療の不足といった個別課題が強調されがちですが、それらを「遠い世界の問題」として捉える限り、学びは表層的な理解にとどまります。本演習では、まず日本自身の社会構造を見つめ直し、その延長線上に国際協力を位置付けるという方法を採用しました。

春学期には、山形辰史著『入門 開発経済学』を通じて、開発理論の体系を整理しました。従属論、構造主義、キャッチアップ論、人間の安全保障、要請主義、アンタイド化、MDGs・SDGs の変遷などを検討し、それぞれがどのような歴史的文脈の中で生まれたのかを確認しました。とりわけ、従属論が示した「中心と周辺」という構造的視点は、支援関係に内在する非対称性を考える上で重要でした。その一方で、韓国やシンガポールの発展事例は、制度改革と人的資本投資による構造転換の可能性を示しています。援助は固定的な上下関係ではなく、長期的には被援助国が援助国へと転じ得る循環を内包していることを理解しました。

また、「人間の安全保障」は、本演習における理論的基軸の一つです。国家中心の安全保障から、個人や地域社会の生活基盤を守る視座へと転換するこの概念は、日本の開発協力大綱の核心でもあります。欠乏からの自由と恐怖からの自由を保障する制度設計は、経済成長率では測れない生活の質を重視する枠組みを提供します。学生は、国際協力が単なる資金移転ではなく、制度と人材を含む包括的な関与であることを学びました。

秋学期には、河合雅司著『縮んで勝つ』を用いて、日本の人口減少社会を構造的に検討しました。出生数の減少、公共交通の縮小、水道料金格差、医療体制の脆弱化など、拡大型社会を前提とした制度が限界を迎えている現実を確認しました。人口減少は一時的現象ではなく、不可逆的な構造変化であり、制度そのものの再設計が求められます。この議論は、途上国の人口動態問題や都市集中問題と本質的に接続可能です。

本演習では、開発経済学と人口減少論を単に並列的に学ぶのではなく、両者を理論的に架橋しました。その架橋概念が「共創」と「環流」です。

理論的総括：共創－環流スパイラル

本演習の理論的中核は、「共創」と「環流」を相互作用的かつ発展的な螺旋構造として統合的に捉える枠組みにあります。本枠組みは、2023 年改定「開発協力大綱」において強調された「共創」の理念と、国際協力実務において蓄積されてきた人材・知見の往還構造とを理論的に架橋する試みです。

まず、「共創」とは、支援する側とされる側という固定的かつ非対称的な関係を前提とする従来の援助観を超え、多様な主体が対等な立場で関わり合いながら新たな価値や制度を生成する過程を指す概念です。ここで重要なのは、共創が単なる協働や参加の同義語ではない点です。共創とは、既存の前提や役割分担そのものが再編され、関係性の構造が更新される動態的プロセスです。したがって、それは成果物の共有ではなく、関係性の再構築過程そのものを含意します。

他方、「環流」とは、人材・知見・制度経験が国内外を往還し、異なる社会的・制度的文脈の中で再解釈されることによって質的転換を遂げる循環構造を指します。知識は単純に移転されるものではありません。異なる歴史的・文化的条件下に置かれることで意味を変容させ、再構成されます。この再解釈の過程こそが環流の核心です。環流とは、物理的移動ではなく、意味の変容を伴う構造的循環です。

ここで重要となるのは、共創と環流が単発的な往復運動でも、閉じた循環でもないという

点です。単発的な往復は、経験の蓄積を前提としません。閉じた循環は、質的飛躍を生みません。これに対し、本枠組みが想定するのは、各段階において再解釈と制度更新が生じ、それが次の段階の前提条件を変化させる「螺旋（スパイラル）」構造です。

螺旋構造とは、同じ地点に戻る循環ではなく、往還のたびに位相が変化し、認識・制度・関係性が高度化していく運動を意味します。共創の成果は、新たな知見と制度経験を生み出し、それが環流を通じて別の文脈へ移動します。その移動先で再解釈が生じ、さらに高度な共創が誘発されます。この連鎖的發展こそが、共創—環流スパイラルの本質です。

なぜ、このような螺旋構造が理論的に必要なのでしょう。それは、人口減少や財政制約といった縮小社会において、課題が固定的に解決されることはなく、制度も関係性も不断に更新され続ける必要があるからです。拡大社会においては量的成長が解決策となり得ましたが、縮小社会においては質的再編こそが中心課題となります。質的再編は、単なる制度移転では達成されません。異なる現場での実践と再解釈を経る循環的運動が不可欠です。その循環が、毎回同一地点に戻るのではなく、次の段階へと発展していく構造を持つとき、それは螺旋と呼び得ます。

以下の図は、この「共創—環流スパイラル」の概念を可視化したものです。



出所：筆者作成（生成 AI を活用して作図）

本年度の FLP 演習 A の活動は、この理論枠組みを教育実践として具体化する試みでした。

まず、海士町実習は、「国内課題を起点とする共創」の現場を体験する機会となりました。人口減少、財政制約、後継者不足といった構造的制約の中で、多様な主体が危機認識を共有し、制度や仕組みを再設計していく過程は、関係性の再構築という意味で共創の具体例です。

同時に、JICA 海外協力隊の派遣前研修（グローバル実習）や帰国人材の受入れは、「知と人材の環流」を制度化する取組です。海外で得られた経験や知見は、国内の制度課題の文脈に置き直されることで新たな意味を獲得します。この再解釈が次の制度設計を促し、それが再び国際的实践へと接続されます。ここに、共創と環流が相互に作用しながら発展する螺旋運動が確認できます。

したがって、本演習は単なる理論学習や事例調査の積み重ねではなく、共創—環流スパイラルを教育プロセスとして体現する試みであったと位置付けられます。

本演習では、国際協力及び国内の社会開発の場を事例として、日本の国際協力の現状と課

題を理解し、持続可能な開発のあり方とはどのようなものかについて一緒に考えていきます。

<活動内容>

本年度の演習 A は、このスパイラル構造を教育実践として具体化する試みでした。まず、理論学習において、開発経済学と人口減少論を並行して学ぶことで、国内課題と国際課題の構造的共通性を確認しました。これは「理論的共創」の段階にあたります。異なる理論体系を統合し、共通課題として再解釈する作業そのものが、共創の初期段階でした。

次に、JICA 関係者による講義を通じ、制度がどのように他国で適応され、変容しながら機能しているかを学びました。制度は輸出されるものではなく、現地の制度文化との相互作用の中で再構築されます。この理解は、環流の具体的理解につながりました。

さらに、海士町における国内調査では、人口減少と人材不足という日本固有の課題に向き合う自治体の実践を確認しました。JICA 海外協力隊の派遣前研修（グローバル実習）や帰国人材の受入れは、まさに知と人材の環流を制度化する試みです。海外で得た経験が国内に還元され、国内課題の再解釈を促します。この循環は、共創と環流が交差する具体的実践例です。

本演習では、
理論学習（開発経済学・人口減少論）

↓

制度理解（JICA 実務）

↓

国内実践確認（海士町）

↓

理論的再統合（共創－環流スパイラル）

という循環を教育プロセスとして設計しました。

国際協力と地方創生をそれぞれ個別に学ぶのではなく、最終的に「共創と環流」という理論によって統合し、再構築しました。この理論的総括こそが、本年度演習 A の最大の成果です。本年度の演習 A は、国際協力と地方創生を別個の政策領域として扱うのではなく、縮小社会における創造的再編という共通課題のもとに統合的に理解する試みでした。開発経済学の理論、人口減少社会の構造分析、JICA 実務の理解、国内自治体の実践を段階的に積み上げ、最終的に「共創－環流スパイラル」という枠組みで総括しました。理念にとどまらず、理論と実践を往還する教育プロセスを構築できた点に、本年度の意義があります。

<実態調査・見学調査・講演会>

① JICA 特別講義（保健医療分野）

対象演習：A

実施日：2025 年 6 月 16 日（月）

講演者：吉田 友哉 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）人間開発部審議役兼次長）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス GG602 教室

実施内容：JICA 職員（保健医療分野及びアフリカ）による講義及び質疑応答

成 果：本講義では、世界における基礎的保健医療サービスの未整備状況と、日本の保健医療分野における国際協力の実践について学びました。特に、母子健康手帳の国際展開を事例に、日本発の制度が各国でどのように適応・変容しながら定着しているかが示されました。

制度は単純に移転されるのではなく、文化・行政体制・財政状況に応じて再設計されます。この過程こそが共創であり、制度の再解釈と再構築が環流を生むことを確認しました。

学生は、保健医療協力が単なる医療技術の提供ではなく、制度設計・人材育成・信頼構築を含む長期的関係構築であることを具体的事例から理解しました。

② JICA 特別講義（教育分野）

対象演習：A

実施日：2025 年 6 月 30 日(月)

講演者：戸谷 幸一 氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）東京センター長期研修課長）

実施施設：中央大学 多摩キャンパス GG602 教室

実施内容：JICA 職員（教育分野及びラオス）による講義及び質疑応答

成果：本講義では、世界における不就学児童の現状、教員養成支援、教材開発協力の実務について学びました。

教育協力は学校建設だけでは完結せず、教員の質、教材内容、言語政策、さらには産業構造との接続までを含む包括的制度設計が必要です。学生は、教育支援が社会全体の制度と連動していることを理解しました。

また、日本の教育経験が他国に適用される際には、そのまま移植されるのではなく、現地文脈の中で再構成されることが強調されました。ここに共創と環流の実践的意味があることを確認しました。

③ 国内実態調査（島根県隠岐郡海士町及び西ノ島）

対象演習：A

実施日：2025 年 8 月 3 日(日)～8 月 9 日(土)

実施都市：島根県隠岐郡海士町及び西ノ島

実施場所：海士町役場、豊田地区、「風と土と」、隠岐島前高校・他

実施内容：町長・副町長・共育課長・議会関係者等との意見交換、JICA グローカルプログラム関係者ヒアリング、地域事業者・教育機関視察

成果：本実態調査は、日本の地方創生の成功事例を視察することを目的としたものではありません。人口減少社会における国家と地域の再編をいかに理論化し得るかを検証し、本演習の理論的中核である「共創－環流スパイラル」を国内政策の現場で実証的に確認することが主眼でした。

海士町は、人口約 2,300 人の離島自治体です。かつては人口減少と財政硬直化に直面し、市町村合併か自立かの選択を迫られました。しかし、同町は合併を回避し、「自立」を選択しました。この決断は単なる行政判断ではなく、「地域の未来を誰が引き受けるのか」という政治的・倫理的選択でした。

町長・副町長との意見交換において強調されたのは、「危機感の共有」という言葉でした。三役の給与最大 50%削減、職員給与平均約 2 割削減という決断は、財政合理化以上に、行政が先に負担を引き受けるという姿勢の表明でした。住民も補助金返上等で応じました。この構造は、政策決定のプロセスそのものが共創であることを示しています。共創とは理念ではなく、行政が先に負担を引き受け、住民が応答するという制度的プロセスの中で具体化される営みです。海士町は、この第一段階を制度的に乗り越えた事例です。

財政基盤を再建した後、同町は「地産地商」を掲げ、外貨獲得型の産業政策を展開しました。いわがき「春香」、隠岐牛、CAS 冷凍技術、未来共創基金などは、地域資源を内向きに循環させるのではなく、外部市場と接続することで価値を高める戦略です。未来共創基金は挑戦者を生み出す制度であり、「主体を増やす仕組み」として機能しています。

教育政策も同様に戦略的でした。隠岐島前高校の魅力化プロジェクトは、廃校回避策ではなく、地域を学習空間として再構成する試みです。探究学習と地域協働型教育は、教育を人口政策へと転換する構造を持っています。祭りの担い手増加や出生数の回復傾向は、教育投資が社会構造へ波及することを示しています。

さらに、JICA グローカルプログラムとの連携は、「環流」を制度化しています。国内で地域課題に向き合った若者が海外協力隊として派遣され、帰国後に再び地域へ還元されます。この循環は単なる人材交流ではなく、知見と価値観の高度化を

伴う往還です。

ここに、本演習の理論的枠組みである「共創—環流スパイラル」が実証されています。共創が新たな人材と制度を生み、それが環流を通じて外部へ広がり、再び高度化した形で地域へ戻ります。この過程は直線ではなく、螺旋的に上昇する構造として理解されます。

教育的成果（学生の思考変容）

本実態調査の最大の成果は、学生の認識枠組みの転換にあります。

第一に、「過疎＝衰退」という固定観念が崩れました。学生の多くは、過疎地域を高齢者中心の停滞空間として想像していました。しかし、港や役場で働く若者の姿を目の当たりにし、「政策によって人口構造は変化し得る」という構造的な理解へと移行しました。問題を所与とみなす受動的思考から、制度設計の可能性を考える能動的思考への転換が生じました。

第二に、「支援する側／される側」という二項対立の解体です。海士町の財政改革は、外部からの救済ではなく内部からの覚悟によって始まりました。学生は、共創とは「支援」ではなく「当事者化」であると理解しました。この視点は、国際協力を学ぶ上で極めて重要です。途上国支援も同様に、主体の覚悟と制度改革なしには持続しません。

第三に、「国際協力と地方創生は連続している」という統合理解です。従来、学生の多くは国内問題と国際問題を別領域として捉えていました。しかし、海士町における JICA グローカルプログラムの制度設計を通じて、国内課題と海外課題が人材循環によって接続されることを確認しました。これにより、国際協力は遠隔地の問題解決ではなく、自らの地域と接続する課題であるという理解へと変化しました。

第四に、「危機感の質」に対する再認識です。学生は自らの地元と海士町を比較し、「危機を誰が自分事として引き受けているのか」という問いを立てました。危機感とは感情ではなく、制度変革へ転換される認識であるという理解が形成されました。

以上を総合すると、本実態調査は知識の獲得ではなく、思考様式の転換をもたらしたといえます。学生は、地方創生を事例研究として学んだものではありません。共創と環流という理論を媒介に、国内外の課題を統合的に捉える枠組みを獲得しました。調査前、学生は過疎地域を「衰退する空間」として理解していました。しかし、現地視察を通じて、その認識は構造的に転換されました。

理論的総括

海士町は完成形ではありません。後継者不足など未解決課題も存在します。しかし、そのような制約条件の中にあっても、縮小社会における再編の方向性を示す実証的フィールドです。本調査は、「共創—環流スパイラル」を理念にとどめず、制度と実践のレベルで確認する教育実践でした。

地方創生と国際協力を別個に学んだものを、最後に「共創と環流」という理論によって総括しました。この統合過程こそが、本演習 A の教育的到達点です。

さらに重要なのは、この統合が単なる概念整理にとどまらない点です。「共創と環流」という枠組みは、今後の国際協力と地方創生を考える上での一つの羅針盤となり得ます。人口減少や財政制約が進行する縮小社会において、国内課題と国際課題を切り離して理解することはもはや現実的ではありません。国内外を往還しながら制度と人材を再編していく視座こそが、これからの政策形成に求められます。本演習で提示した枠組みは、その方向性を示す思考の基軸となるものです。

同時に、「共創」と「環流」を理論的に統合する試みは、いまだ確立された学

説として整理されているものではありません。開発協力大綱において理念として示されているものの、それを学術的枠組みとして体系化し、国内政策との接続を明示的に論じる試みは途上段階にあります。その意味で、本演習は既存理論の受容にとどまらず、理論形成の可能性を学生とともに探究する挑戦的営みでもありました。

さらに付言すれば、この理論形成の過程においては、学生一人ひとりの感性や問題意識が重要な役割を果たしました。共創と環流を固定的概念として学ぶのではなく、「なぜ国内と国際を分けて考えてきたのか」「人口減少社会において国際協力はどのような意味を持つのか」といった問いを学生自身が発し、それを理論的枠組みに照らして再解釈する作業を重ねました。理論は教員から与えられる完成品ではなく、問いと対話の中で磨かれていくものです。この意味において、本演習は学生の思考そのものが理論の発展に関与する場でもありました。

理論が完成された体系として存在するのではなく、現場と感性との往還の中で生成されるものであるという理解こそが、本演習の学びの核心です。このような挑戦性と創発性を含んだ理論的総括を経験したこと自体が、学生にとっての重要な知的経験であり、本演習の教育的到達点であると考えます。

④ ラオスフェスティバル参加

対象演習：A

実施日：2025年5月25日(日)

実施都市：東京都渋谷区

実施場所：代々木公園

実施内容：ラオス文化紹介イベント参加、ラオス関係者との交流

成果：ラオスフェスティバルへの参加は、文化理解を通じて国際協力を考える機会となりました。

料理、音楽、民族衣装、言語などを通じ、国家や制度の枠を超えた生活文化に触れました。学生は、国際協力が制度や経済だけでなく、人と人との信頼関係の上に成り立つことを実感しました。また、日本国内での多文化共生の現状を観察することで、国内外を分断しない視座を具体的に体験しました。文化的交流は制度的協力の基盤を形成する信頼構築のプロセスであり、共創を支える前提条件であることを実感しました。

FLP演習C

<テーマ>

国内課題と接続する国際協力の再構築
—共創と環流の理論的統合—

<授業の概要>

本演習Cは、学部4年次におけるゼミ論文の完成を目的とする研究指導科目です。本年度は、単なる個別助言の積み重ねにとどまらず、研究設計・方法論・論文執筆技法を体系的に指導する体制を明確に構築しました。

具体的には、教員作成の『論文執筆の手引き』『文書作成の手引き』及び研究設計資料を活用し、ゼミ論文を「思いつきの問題提起」ではなく、「問いの構造化から仮説設定、検証、再解釈へと至る一連の学術的プロセス」として位置付けました。また、リサーチクエスションの精緻化を重視し、問題意識と問いを峻別しながら、「何を明らかにするのか」を明確に定義できる水準まで推敲を重ねました。

研究テーマについては、教員側が一律に方向性を定めるのではなく、学生一人ひとりの関心や問題意識を出発点として選択させました。そのうえで、それぞれの関心が学術的問いとして成立するよう、理論的枠組みとの接続、先行研究の整理、方法論の整合性の確保を段階的に指導しました。学生の主体性を尊重しつつ、それを分析可能な研究課題へと高める伴走型指導を行いました。

本年度のゼミ論文のテーマは、①「カンボジアにおける LANGO 法制定と市民社会スペースへの影響」、②「カンボジアにおける英語教育格差の実態と社会的影響」、③「ラオスと教育投資の関係—ラオスにおける高等教育インセンティブ低下の要因分析—」、④「ラオスの初等教育における教員の質と学力向上における国際援助の役割」、⑤「法整備支援は治安改善に寄与するか—ラオスに対する支援事例を通じて—」です。政治、教育、労働移動、法制度といった多様な領域にわたりますが、いずれも制度形成と社会構造の変容、国際援助の影響を分析対象としており、国際協力と国内制度改革の接点を検討する研究となっています。

<活動内容>

本年度の演習Cでは、対面授業及びオンライン授業を併用しながら、ゼミ論文の完成に向けた段階的指導を実施しました。定例の演習時間における全体指導に加え、各学生の論文執筆の進捗状況に応じて適時個別指導を行いました。研究の進捗や課題の性質は学生ごとに異なるため、一律的な進行管理ではなく、段階ごとに必要な助言と修正を重ねる伴走型の指導を徹底しました。

テーマ設定段階では、関心の整理からリサーチクエスションの明確化までを重点的に指導しました。その後、先行研究の検討、仮説設定、調査方法の妥当性検証、データ分析、結論の構造化に至るまで、各段階で必要な文献、政策資料、統計データ等を提供しながら論理的な一貫性を確認しました。特に、因果関係の整理や分析の飛躍を防ぐことを重視し、複数回のドラフト提出と修正を通じて文章の精度を高めました。

研究の質的到達点としては、第一に、各論文が仮説検証型の構造を備え、単なる現状報告にとどまらない分析水準に到達した点が挙げられます。第二に、方法論とリサーチクエスションの整合性が担保され、論理的飛躍の少ない構成となりました。第三に、先行研究との対話を通じて各研究の独自性を明示することができました。

これらの水準を可能にした背景には、実務経験と学術的訓練の双方を踏まえた指導体制があります。教員は JICA における国際協力実務の経験を有する一方で、国際学分野の博士号を取得しており、制度運用の現実的理解と理論的厳密性の両面から指導を行いました。政策実務の視点と学術的検証の視点を統合することで、研究の現実適合性と理論的整合性を同時に確保しました。

さらに、今後の展望としては、2 年次に国内調査を通じて国際協力と地方創生、そして共創と環流の理論的橋渡しを学び、3 年次に海外調査を実施し、現地の制度運用や社会構造を

実地で検討する流れを明確化します。そのうえで、4 年次において、国内外の調査で得られた知見を踏まえゼミ論文のテーマを選定する段階的教育構造を確立します。

このように、理論学習、国内調査、海外調査、ゼミ論文執筆を一貫したプロセスとして設計することで、「共創一環流スパイラル」を教育課程そのものに実装します。国内外を往還しながら問いを深化させる構造は、理論的枠組みの実践的展開でもあります。

本年度の演習 C は、学生の主体的関心を尊重しつつ、学術的水準へと引き上げる伴走型指導を行い、理論と実務を往還する研究教育の実践を行いました。